副田先生追悼

野　上　　元

2010年頃に副田先生が組織された科研（基盤研究Ａ「戦後日本における内政体制の研究」）の研究グループに参加させて貰い、遅ればせながら先生と知り合うことができました。毎回の研究会の参加者は、中野サンプラザの巨大な研修室に四角に並べた長机がそれぞれ一杯になるほどいました。私はまだ筑波大学で勤め始めてからまだ数年でしたが、この大学に勤めると、これだけ大きな研究グループを組織できるようになるのか、と驚愕したのをよく覚えています。先生から投射されるエネルギーの大きさと研究者養成機関としての筑波大学の実力が強烈に印象づけられ、30代を終わる頃の自分に「よし、ここで自分も精一杯頑張ろう」と思わせてくれました。毎回の研究会の後には懇親会もあり、少し遅れて入ると先生の正面の席が毎回なぜか用意されていました。新参者の特権だったのかもしれません。研究会の議論の続きもでき、研究者としてその後も仕事上意識せざるを得ない知り合いや先輩が何人も出来ました。

各回の報告者は二人で、共通テキストで認識を共有しながら、旧内務省に相当する内政関係諸官庁・諸部局のそれぞれを担当報告者に割り振って進んで行くという毎回の研究会のスタイルについても、大きく学ぶことができました。重要だが限定されすぎてもいない問題意識で皆を包み、具体的な分担を与えて引っ張って行く、ということだったかと思います。私の方はと言えば、副田先生に認識して貰いたくて、一知半解の新参者にもかかわらず毎回べらべらと喋りすぎて、帰り道にひとり反省するのが常でした。逆に先生のコメントはいつも短く堅実で、報告の内容だけでなく、報告者ひとりひとりの研究者としての人間的個性も踏まえた本質的なものでした。

私が研究会で報告し、科研報告書に寄せた論文は、「『内務省』の戦後史」というややトリッキーなものでしたが、そこには「牧民官意識のゆくえ」というテーマを込めていました。数多くの研究者を牧（やしな）ってきた副田先生に問題意識が伝わると良いな、と思って書きました。そこには確かに、エリートの輝きと矜恃があったと思います。

もう一度あの科研の続きが組織されることを信じて、あるいは副田先生が編まれるであろう編著に呼ばれることを待ってその後も資料を集め、ひそかに関心を温めてきましたが、先生のご逝去でそれが叶わなくなったことは痛恨の極みです。

「戦後内政史」という、歴史社会学の重要なテーマの存在を教えてくださいました。

このような機会を与えてくださったにもかかわらず、また研究者・教育者として恵まれた環境を与えられながらも、力不足による自分の惨状は覆うべくもないですが、先生と出会えたことの幸運に応え、その学恩に少しでも報いるため、今後も研鑽を続けて行きたいと思っています。